植物観察あんない

桧山と狩場茂津多両道立自然公園の自然 ②

三木　昇

みき　のぼる
1951年京都に生まれる。
信州大学農学部林学科卒業。林業会社で造林に従事後、本協会に勤務、自然公園等調査に従事。現在野生生物情報センター運営委員。自然紹介業あるいは、自然の講釈師と自称。

この項は狩場茂津多と桧山道立自然公園の植物調査をもとに、いわば公園観光ガイドの植物編というものである。

この二つの公園は渡島半島の日本海側、黒松内低地帯の寿都から南へそして江差の南、上ノ国町までの海岸線の部分と、山地部分の狩場、大平山の一帯、桧山地区では雲石峠までの山地である。それに海上に浮かぶ奥尻島が加わる。二つの公園を北から南にドライブガイド風に記してみた。

公園は鰊で栄えた寿都町の町外れから始まる。海岸段丘の段丘面を弁慶岬へと走る。以後長い海岸線のうち、人家の多いところは避けて風光明媚なるところを公園として指定していると思えばよい。しかし、長い海岸線全体がよい形で保全されていることが重要で、人々の生活する町並をも含めて美しい姿であってほしいものである。岬につくられた展望所から見えるのは風景全体である。

風景を読む・植物の分布

風景は大地のなりたちと深い関連をもっていることは当然である。大地の表現形が植物ということもいえる。この地方の海岸段丘がよく発達することは、その斜面にエゾイタヤの林ができ、あるいは岩壁にコモチイワレンゲやアサギリソウが育ち、ミヤマビャクシンが岩場に根をおろすというのもその対応の一つである。また、大平山のように石灰岩という岩石のためにオオヒラウスユキソウという特産種をもつこと、またこの地域の急斜面は谷筋にヒメヤシャブシなどの雪崩地の植生をつくるのもその対応である。

図1にこの公園内の地形と植物との対応について略図を載せた。これを頭におきつつ車を走らせてみたい。この公園は海岸段丘の、海に迫る急斜面とその上の平坦地をながめながらの旅となる。

狩場茂津多地域

(1)　海岸のススキ草原

寿都からの平坦地は海岸段丘の段丘面である。急な崖の上にあることは弁慶岬に降りて歩いてみるとよくわかる。この平坦地に広がるのがススキ草原である。

この平坦地であるが、ここはかつて漁民、それは鰊漁が盛んであったころを思い起こしてみるとよく分かる。たくさんの人々がこの地に生活して、その人達が平坦な土地を耕作していたところである。今も一部は耕作されているが、耕されることのなくなった畑はススキ原になってしまった。海岸線の特徴ある植物景観である。

おそらくここは当初はエゾイタヤやシナノキ、ミズナラ林であったはずである。それを燃料として切り、畑にしたのである。ということでこの地域の海岸一帯は、よほどの急傾斜地でないかぎり何度も人々に利用された林である。この視点は忘れてならない植物ウオッチングの要点である。

このように公園各所にある平坦地のススキ原はおおむね耕作放棄地と思えばよい。畑にならないような急な段丘斜面のものは自然草原と思えばよい。

このススキ原はススキの他、オオヨモギ、アキノキリンソウ、あるいはアマニュウなどの草本が夏には花を咲かせているが、いずれは周辺から侵入するササ原そして、ヤマグワやエゾイタヤの林にもどっていくであろう。

また、公園地域ではないが弁慶岬の背後にある歌島高原は広いススキ草原でここからの眺めもなかな

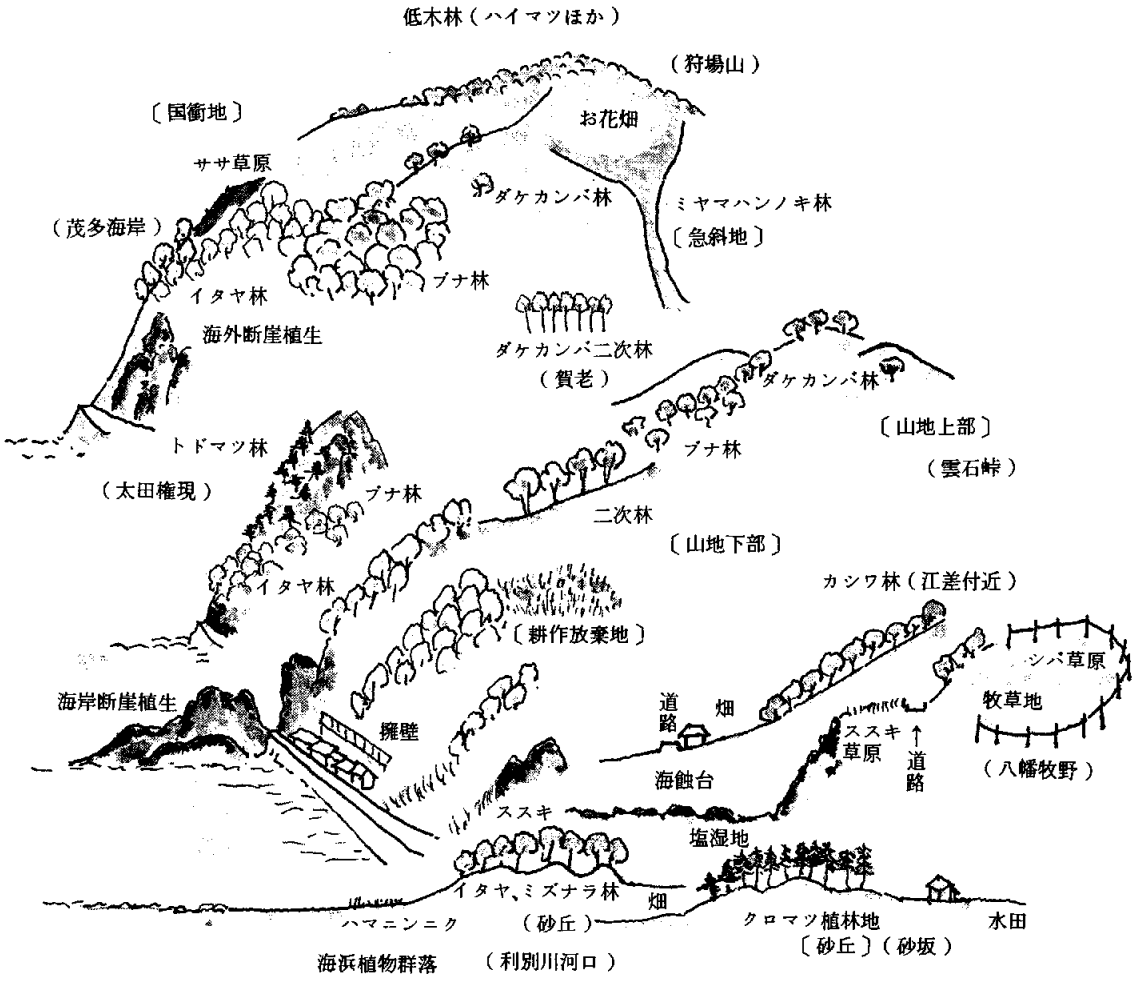


図1　渡島半島日本海側植生配置概念図

かよい。途中の道ではカシワ林があるのも海岸の林らしい。

(2) 段丘斜面のイタヤ林

弁慶岬から車をすすめると海岸段丘面から段丘斜面下の海岸との間の道を進むことになる。人々は段丘斜面と海までのわずかの平坦地に家を構え暮らしている。

この人々が生活している人家の裏に迫る斜面にあるのがエゾイタヤ林である。江差の方まで行くとカシワ林が多くなるが、これからの海岸線の段丘斜面の林をみればエゾイタヤ林と思えばよい。人家の裏は時にはコンクリートの擁壁が作ってあるが、人家のない海岸地帯ではイタヤ林の下はオオイタドリやアマニュウなどのセリ科の背の高い植物の草地になっていることが多い。この擁壁をみて分かるように人家裏のイタヤ林は防災上から伐採されずにきたもの

写1　寿都のススキ原

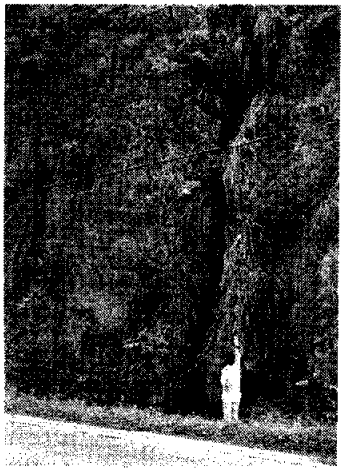
と考えられる。

海岸をゆっくり進むとやがてイタヤワラというバス停があり、これもいかにもイタヤ林の多い地域らしい地名である。こんなところも気をつけて見ているとおもしろいだろう。それからこのイタヤ林はたいした傾斜ではなさそうだが、中に入ってみるとなかなか急な斜面でちょっと立っているのが大変な斜面である。調査の時にも木の根元にたって記録をとった。時にはずるずると小さな岩石片が足元からくずれていくのである。

こんな姿を見るのは公園外ではあるが島牧村の本目灯台に上がるのがよいだろう。イタヤ林もススキ原も見え、山々の眺めもなかなかよい。

(3) 海岸断崖植生

海岸をさらに進むとやがて断崖絶壁の壮観な茂津多海岸にいたる。上部はイタヤ林その下の荒々しい岸壁にもたくさんの植物が見られる。春早くはエゾイヌナズナが白い点となって岩壁に見える。葉が厚く乾燥に耐えられるコモチイワレンゲやキリンソウから、岸壁といっても水の滴り落ちる湿ったところではダイモンジソウ。水の流れる小さな滝にそってはスゲの仲間で長い葉をしたタヌキランが成育するなど、それぞれの条件に応じて植物が成育する。



写2　タヌキランが成育する海岸断崖

岩のわずかな隙間あるいは棚の土のたまりにはこの他、オオウシノケグサのような目だたないものから、六月下旬のころのエゾカンゾウと称されるゼンテイカ、スカシユリも多い。このほか白緑色の美しいアサギリソウなどもよく目立つものである。低木ではシンパクなどと通称されるミヤマビャクシンが岩に濃い緑で張り付いている。かつてはたくさんあったがおそらく採りやすいところは盗掘されてしまったのであろう。こうしたものは海岸断崖植生と総称される。

この植物がわずかにある岩壁と上部のエゾイタヤ林との間の斜面はススキなどの大型の草の草原になっている。カンゾウも多く、夏になれば紫のツリガネニンジンも多い、茂津多トンネル前の駐車場などで車をとめて眺めるのがよい。

(4) 砂　丘

茂津多岬を抜けて海岸の断崖の風景を見てやがてその段丘の終わる瀬棚の立象山に至る。この展望台に上がって四方を眺めるのがよい。ここで断崖がきれて、南の鷹ノ巣岬までの間は砂丘が続く。中央には後志利別川が流れ込み、岬の付根の川尻には太櫓川が流れ込む。それらの川が運んだ砂と波浪が作ったものである。

さてその砂丘であるが、後志利別川の北側、瀬棚側は公園地域からはずれており、そこは砂採取のために砂丘の姿を失っている。道内の砂丘とその上の砂丘植生はこうした砂採取のために次々と姿を失っている。ところが川の南側はみどりの筋が鷹ノ巣岬の段丘の端につくまで続いている。ここにはカシワとエゾイタヤの砂丘林がある。普通は砂丘のような急斜面でなく土の深いところでは、石狩浜のカシワ林というような姿にはなるが、ここではイタヤ林があることが興味深い、両者はモザイク状に分布する。

ここは北桧山の町から後志利別川を渡り鷹ノ巣岬の方向に進み畑の中を通り、国有林の林道の入口から歩くことになる。クロマツの防風林も造成されている。

(5) 砂　浜

砂丘に登り波打ち際にでる。ここでは波打ち際から波浪に強い背の低いもの、地面にはりつくようなハマニガナ、ハマボウフウ、コウボウムギ、シロヨモギなどがあり、その背後はハマニンニクそしてハマナスというようになり砂丘の斜面に至る。海のものはいつも塩の粒をかぶることになり、それに耐えられること、そして浜辺では、毎年のように波浪に洗われ、それに流されず、また砂に埋められてまた再生するということの繰りかえしである。これに対処するべく波に強く長く深い地下茎を持つ、あるいは砂の移動で埋もれてもすぐに砂の上に芽を出すことができなくては生き抜けない。

(6) 弁天岬

砂丘を抜けて太櫓に至るとまた海岸段丘となる。段丘斜面の植生は基本的にはかわらない。この地域では弁天岬からの眺めがよい。「古池やかわず飛びこむ水の音」という幕末にたてられた句碑があるのもこの地域の歴史の古さ、人間との関わりを抜きにして植物景観を見ることができないということを思いおこさせる。ここからは太櫓の背後のカシワ林が見える。この地域の斜面が普通エゾイタヤ林であるのにめずらしい存在である。ススキ草原に花も多い。

公園は水垂岬のススキ草原で終わる。ここから先は手つかずの海岸植生が残されているのであろうが、

公園には指定されていない。昔のこととてその実態がわからずに公園指定地域とならなかったものだろうか。道がなく我々も調査でいくことができなかったが、現在海岸線を大成町にむけて工事中でどんな植物群落が失われているだろうか気になるところである。

なお公園外ではあるが北桧山町の鰍（うぐい）沼は大きな浮き島があること。周辺のブナ林を散策する道もつけられており、ここを訪ねるのもよいだろう。

(7) 狩場山のブナ林

海岸を見てきたが、残してきた山地を見ることにしよう。この地域の特色はなんといってもブナ林である。狩場山はそのブナの林をみるのによいところである。賀老の滝へまずいってみよう。しかし、ここでは滝の景観はすばらしいが、ブナ林はここよりも林道をさらに奥に行った方がよい。

ところでこの賀老台地はかつての開拓跡地であることを頭においてほしい。今でこそダケカンバ林やササの林にはなっているが、こんな平坦地を人々がほっておくはずはない。かつて入殖者がここに鍬をおろしたが、山深く、雪のために降りてしまった。このことを意識しておくと、平坦地が奥の斜面にはいると森の様子が一変することがよく分かる。国有林に入るとブナの林がでてくるのである。最初の広場、林道工事の土拾場に車をとめてしばし山道を歩くのがよいだろう。きれないブナの林が続く。積雪の深さを示すといわれる幹のコケの位置が地上四～五㍍のところついており、積雪の深いことが読み取れる。六月には林道ぞいにハクサンチドリが咲き、さらに登っていけばササの下にフギレオオバキスミレやシラネアオイの花が咲いている。

写3　狩場山のブナ林

写4　賀老の滝

林道をそのまま行くと、しだいに白い肌のダケカンバが多くなる。やがて橋のたもとだけがあるところにいたる。奇妙な風景であるが、これは対岸までいって谷間を覗き込んでみるとその意味が分かる。谷の底に二つ鉄橋がおちている。つまり雪崩で大きな橋が二度ながされたということである。そういえば滝のみごろは雪解け水のころだというが、これはそれをよく物語っている。日本海側の雪の多い地域らしい。当然、植物もその雪の下になって、広く山地上部に低木林が発達している。尾根はハイマツであり、ミヤマハンノキやダケカンバの低木林が広く分布するのが特徴である。しかし、これは山の上にのぼらないとその広がりを見ることはできない。山頂部には広いお花畑があっていろいろなお花畑をたのしめる。

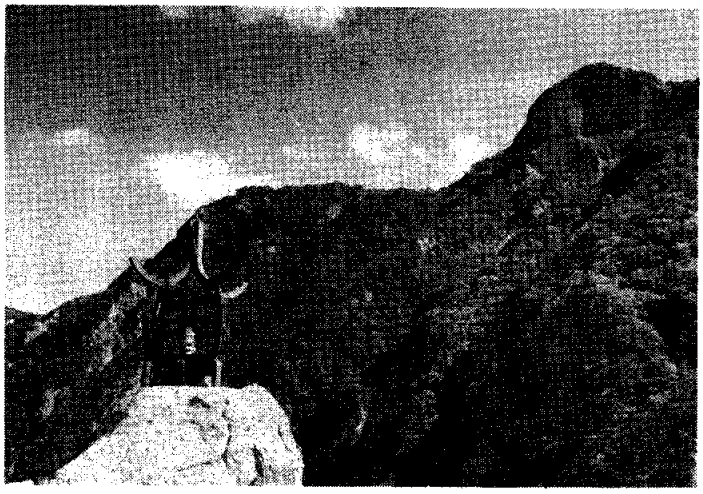
写5　狩場山　なだれで飛ばされた橋

桧山道立自然公園

さて、桧山道立公園に話しを移そう。この公園の植物の配置も基本的には同じである。海岸段丘にはイタヤ林ではあるがカシワ林も出てくる。これは土質の違いで、カシワのところは傾斜も緩く石礫地ではない。岩場に海岸断崖植生、海岸段丘の段丘面上のススキ自然草原、耕作放棄地のススキ草原、砂浜には海浜植物がある。上ノ国ではシバ草原の存在も特徴的である。

(1) 海岸線を南下する

公園の海岸線は水垂岬の南、大成町の尾花岬から始まる。この近くに太田権現の祭られた海に迫る急な斜面がありこの森がよい。イタヤやシナノキの海岸の林、上部ではブナの林となりその変化が分かる。またここはトドマツが多く、針葉樹林が海岸近くまであるという公園内唯一の風景である。また、この辺り一帯の帆越岬の海岸草原も美しい。



写6　太田権現

長磯海岸の海岸断崖風景、そして見市川、鮎川海岸と進む。ここから雲石峠への道をたどると山地に入りブナの林と峠近くではダケカンバ林が見られる。

乙部町の鮪岬は一部は桜園になっているがイタヤ林もよくのこされている。先端の岩場には海辺の植物でハマボッスなどもある。この特徴は岬の南側にある海触台地の岩礁にウミミドリやエゾツルキンバイのはえる塩湿地ができていることである。この地域ではめずらしい分布である。

写7　太田権現より帆越岬方向にうっすらと奥尻島がみえる

乙部の町を過ぎて五厘沢に至ると左手に海岸の山の斜面にカシワの林が見られるようになる。これから江差周辺には斜面にカシワの林がよく見られる。

五厘沢のトンネルの手前で道を右にとり、段丘の上に上がり、厚沢部川の河口の砂丘の見えるところまで進む。緑のみごとなクロマツ植林地がある。この砂丘の森は人間の自然回復の努力の後をたどるのにとてもよい場所である。

そしてほどなく江差の町に至る。江差の町の前の鷗島はイタヤの林と海側はコモチイワレンゲなどの海岸の植物、オオイタドリなどの海岸草原がみられる。

上ノ国の海岸までは砂丘があり、ここにはカシワ林のなごり、海側にはハマニンニクなどの海浜植物が見られる。

(2) 八幡牧野のシバ草原

上ノ国町は歴史のある町である。町の背後の夷王山山麓の勝山館の跡や墓所などがその歴史を物語る。

夷王山一帯は八幡牧野と呼ばれる放牧場である。今ではほとんどが外国産の牧草地となったが機械の入れない斜面などに北海道でも珍しいシバ草原がわずかに残っている。外国産の牧草の種子などなかった時代、山野に長く家畜を放牧しておくと、背の高いものは食い尽くされ、踏み付けられて淘汰される。背の低い馬などに主要部が食われないそんな草だけがやがて残る。これがシバである。なんのへんてつもない草であるが、温帯の放牧地の草原の北限地として貴重なものである。放牧を続けないと他の背の高い植物にとって変わられるところだが、現在肉牛

の放牧が続けられシバ草原が維持されるという結果になっている。残念ながらこれは牧柵の中に入らないと見ることができない。

また、家畜はトゲのものや有毒のものをたべないためにそうしたものが草原の中に残る。キンギンボク、ノイバラ、ワラビなどがそれで、ヤマツツジもその一種である。ここがツツジの名所となっているのも最初はこうしたことによるものである。

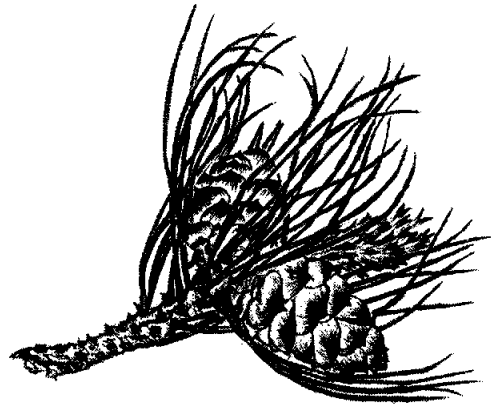
(3) 奥尻島

島は海を渡らなくてはならないので、未知の島という印象を受ける。植物的にはオクシリエビネという特産種や対馬海流という暖流に囲まれて北海道ではめずらしい植物の分布がる。しかし景観的には本島とかわりはない。

海岸ではエゾイタヤの林が段丘斜面を覆い。海岸にはツリガネニンジンやあるいはノコギリソウの仲間などの海岸草原が美しい。森林としては硫黄鉱山のあった地域にキタゴヨウが小面積あるのが特徴である。またブナのよい林が残されており、この森の保護について報告書が先年の道議会質問になったのも本協会がかかわったからこそと考えている。ただし次年度の報告書の表現に配慮が相当に要求されたのであるが……。

最後はかけ足になってしまったが、旅の参考になれば幸いである。

ヒノキアスナロ



ハイマツ

イチイ